

異様な米国大統領選挙

米国大統領選挙は、バイデン大統領との対決となる。112年ぶりの前現大統領対決になり、トランプ前大統領が勝利する場合には、現時点の世論調査では史上一人目の返り咲きとなる。本來、ダイナミックな世代交代が行われるはずの米国で、前代未聞の老老対決だ。さらにトランプ前大統領は4件の刑事裁判を抱えた候補者だ。大統領選挙までに判決は出そうにないといわれるが、裁判手続きは大統領キャンペーンと並行的に行われることになる。異様異様であるのはそれだけではなく大統領選挙だ。

2024.3.22
い。トランプ前大統領は2020年「アメリカを再び偉大にする」年、「アメリカを再び偉大にする」ト叫び再選を狙うが敗北し、選挙結果を受け入れないとして支援者の議会襲撃事件を引き起こした。そのトランプ前大統領が同じ呼びかけで再び共和党大統領候補となるのは、現時点の世論調査ではバイデン大統領より5ポイント程度引き離し優位にあるという。バイデン大統領が高齢すぎることへの懸念はわかるが、大統領としての実績が大きく劣るわけでもないのは、米国の分断の深さだ。これはトランプが引き起こした訳ではない。米国内で長年にわたって蓄えられてきたエネルギーが、津々浦々やハリケーンのように人々や住宅を飲み込んでいるようだ。既成の政治、インサイド・ベルトウェー（ワシントンの政府・議会を取り巻く環状道路）と言われる意思決定機構が国民に満足な生活をもたらしてこなかつたという強烈な不満がトランプにより象徴されて

ウェーブ 時評 wave

田中 均



たなか・ひとし=69年京大法卒。外務省経済局長、
アジア大洋洲局長、外務審議官を経て(株)日本総
研国際戦略研究所理事長を経て特別顧問、(公財)
日本国際交流センターシニア・フェロー。

クタンクや大学で講演し、日本の懸念を伝えるとともに、有識者たちと懇談した。何よりも強く感じたのは、米国の分断の深さだ。これはトランプが引き起こした訳ではない。米国内で長年にわたって蓄えられてきたエネルギーが、津々浦々やハリケーンのように人々や住宅を飲み込んでいるようだ。既成の政治、インサイド・ベルトウェー（ワシントンの政府・議会を取り巻く環状道路）と言われる意思決定機構が国民に満足な生活をもたらしてこなかつたという強烈な不満がトランプにより象徴されて

いるということではないか。20年にわたった中東での戦争、リーマンショック、コロナのまん延、インフレという苦難の原因を既成の政治に求め、トランプはそこから脱出を可能にする存在と捉えられるといふことではない。刑事訴追や民事訴訟でトランプが追い詰めらるべきだといふ詰められるほど「魔女狩り」というトランプの主張が現実味をもつて受け止められてい

ているのではないか。そのような「破るだろうし、また大統領選挙が示す米国の分断は間違いく今後も

トランプに対する見方を見直したい。私は3月1日より8日までワシントンDCを訪れた。シン

トランプに対して、29歳で上院議員に当選した後、貫して体制内で政治に携わってきたバイデン。見事な対比だ。ワシントンのインテリにとつてみればトランプの再登場など考えたくもないことで、トランプの優位が伝えられても、最終的に「民主主義を破壊するトランプ」が勝利するはずがない、と考える。

トランプの優位が伝えられても、これまでいろいろな事が起り得る。失業率が急速に上昇し、株式市場が一気に下落するといった事が考えられないではないし、第三の候補者の存在により、過半数の選挙人が獲得できず2025年1月の新議会になだれ込む可能性がないわけではない。今回の大統領選挙の結果は日本に大きな影響を与えるのではないか。そのような「破るだろうし、また大統領選挙が示す米国の分断は間違いく今後も

続いているのだろう。大統領に続いているのだろう。注視ていきたい。